

大会シンポジウム

台湾社会の中の〈日本〉の変遷 ——文化人類学における可視化と不可視化——

三尾 裕子

はじめに

第1節 日華断交はどのような区切りなのか？

第2節 日華断交から考える台湾における〈日本〉認識研究の課題

第3節 ポストインベリアリティという課題

おわりに

(要約)

日華断交は、日台間の外交、政治、経済関係などの枠組みを変える大きな画期であった。では、この事象は人々の暮らしをどのように変えたのだろうか。本稿では、1972年の日華断交を文化人類学的な立場から見た時、それを自明な区切りと見たり、逆にその区切りを重要視しないことで、可視化されたり不可視化されたりするものがありうることを指摘する。また、日華断交という歴史的な事象から出発することで、台湾社会の中の〈日本〉認識研究が陥ってきた問題点について、①戦後台湾において受容された日本文化の戦前との連続性あるいは新たなそれとの出会い、②〈日本〉認識を構築する人々の多様性の2点を指摘したい。更に③台湾社会を見つめる日本人研究者のポジショナリティは如何なるものであるべきなのか、あるいはありうるのかについて論じる。

はじめに

台湾を研究する日本の文化人類学者の中には、台湾の民主化以降、大日本帝国による植民地統治が当時の体験者やその子孫たちにどのように認識されているのか、そして日本による植民地統治を受けたことが、今日の旧被支配者の社会や文化の形成、維持、変化とどのように関わってきたのかについて検討してきた研究者が少なくない。このような研究課題は、欧米の人類学における旧植民地に対する見方や描写に関する再検討がなされたという学問的潮流の影響を受けている。植民地主義との共犯関係が指摘されていた人類学は、非欧米社会を「伝統」という名のもとに「不変の」「遅れた」社会として記述してきたが、実際には、その「伝統」自体が支配の都合のために作り出されたものであることが明らかにされた。また、被支配者を抵抗する者が服従する者に単純に二分化する見方を乗り越えるような視点や、脱植民地化過程の中で、旧被支配者の文化が旧支配者のそれに一方的に影響を受けたのではなく、両者の間の絡み合いの中で創られる混濁性に注目する視点が強調されるようになった。

中華文明や近代西洋文明の先進性を追いかけてきた日本が東アジアにおいて進めた植民地支配を、近代文明をけん引した欧米のそれと単純に同列に並べて論じることはできない。このことを前提にしたうえで、西欧のポストモダン以降の人類学の刺激を受けて、日本の植民地主義、脱植民地化を検討する議論が興隆した。筆者が組織した共同研究では台湾と旧南洋群島を舞台にこの問題を検討したが、その際にもう一点分析の軸に置いたのが、「代行された脱植民地化」(若林2007)という概念である。上記2点の条件を基礎としながら、これまで筆者らの共同研究では、

日本時代を経験した人々やその子孫が、どのように〈日本〉¹と向き合ってきたのかの一端を明らかにした(三尾・遠藤・植野編 2016)²。

しかし、いまだ解明されていない問題も少なくない。日本台湾学会第24回学術大会の公開シンポジウムでは、「日台関係の50年——日華断交を超えて——」と題して、日華断交後の50年間に大きく進展したと印象付けられる日本と台湾との関係の歩みを振り返り、今後の50年を展望することを趣旨として議論が繰り広げられた。そこで、本稿では、1972年の日華断交とは文化人類学的な立場から見た時、どのような「区切り」であるのかないか、また、そのような「区切り」を設けること、ないしは設けないことによって、台湾社会の中の〈日本〉の何が可視化されるのか、あるいは不可視化されるのか、そしてそれらのことを通して台湾社会を見つめる日本人研究者のポジショナリティは如何なるものであるべきなのか、あるいはありうるのかについて、論じていきたい。

第1節 日華断交はどのような区切りなのか？

1972年9月29日、中国大陸を訪問した当時の首相田中角栄は、中華人民共和国の当時の国務院総理の周恩来とともに「日本国政府と中華人民共和国政府の共同声明」(いわゆる「日中共同声明」)に署名し、日中国交正常化を実現させた。このことを受けて、中華民国の外交部は「対日断交声明」を発し、「中共匪偽政権」を承認して中華民国政府と断交した日本を激しく非難し、国交を断絶した³。

このような事態が、中華民国という国にとって、その国際社会における正当性を減じるものであったことは否定できないだろう。当時の新聞は、こぞって日本を厳しく非難した。

中華民国は、日本以外にも多くの国と国交を失っていくが、日本は中華民国政府にとっては日中戦争を戦った相手であり、蒋介石が「以德報怨」から厳しい賠償も求めず、天皇制の存続も許容したのであるから、他の国とは大きく異なり、今こそ中華民国の恩に報いるべきと考えられたのかもしれない。事実、当時の新聞の見出しには、「田中忘恩負義売友媚匪(田中は恩を忘れ友を売り匪賊に媚びた)」(『中央日報』1972年9月30日第2版)、「譴責田中背信忘義謬行(田中の裏切り、義を忘れたこと、誤った行いを糾弾する)」(中央日報』1972年10月1日第3版)などの文字が躍った。

しかし、本稿で問いたいのは、中華民国政府の視点からではなく、文化人類学的な視点、つまり生活者の立場から日華断交を見た場合、この歴史的イベントにどのような意味があるのか、という問題である。言い換えれば、1972年は、台湾に生きている人々の生活にとって、断絶となるような事態だったのかどうか、という問題である。筆者は、台湾社会の民主化の進展の中で台湾の人々にとって日本による植民統治がどのように記憶、認識され、またその後の彼らの社会や文化の構築と絡み合っていたのかを考察し、その成果をいくつかの共同研究の成果として出版した。しかし、日華断交という問いをシンポジウムのテーマとして引き受けることは、これまでの研究に対する筆者の歴史認識について、再考を迫るものとなった。

そこで、本稿の考察を進めるうえで、まずは上水流久彦が1945年8月15日、すなわち日本の敗戦（終戦）が台湾において持つ意味を考察した論考を参照したい（上水流2020）。上水流は、この日が日本にとっては「戦後」の始まりであると一般的に考えられているものの、同じことが台湾に通用するわけではないと述べる。また、そもそも日本人研究者が日本国の視点で8月15日が台湾にとっても歴史の節目であると語る合理性はない、と主張する。上水流は、過去についての認識を記述するうえでは、ある区分を特権化して語りうる理由をそのような認識が生まれた社会的、経済的、政治的状况を踏まえて分析する必要があると主張する（上水流2020、32頁）。

つまり、初めに区切りありきで何かを語ることは、ある特定の見方を無前提に他者に押し付けることになる。では、これを踏まえて日華断交は、台湾の人々の生活において、果たして歴史の画期、あるいは断交後の日台関係の起点として自明のものなのだろうか。正直に述べるならば、筆者はこれまで現地調査を通して台湾の人々から〈日本〉についての歴史認識を聞き取ってきたものの、その中で日華断交が主題化して語られた経験をほとんど持ち合わせてこなかった。時に、日本の映画が上映されなかった時期があったとか、日本のものが入ってこなくなった時期があったと語る人に会うことはあった。また、日本留学向けの奨学金も無くなった、ともいう。しかし、それらの事象は、常に日華断交と結びつけて語られたわけではなかった。また断交と日本の「忘恩」とを結びつけて語った人も、筆者の記憶にはほぼなかった。筆者自身の経験を振り返ると、1980年代半ばに台湾への留学に際し、日本の文部省（当時）が設けていた「アジア諸国等派遣留学生制度」の対象国に台湾が入っていなかったために、民間の財団を探さねばならなかったことや、90年代初頭に着任した国立大学で台湾への海外出張を申請した際に、台湾の政府関係者と接触しないという誓約書を書くことを求められた。これらのことは、日本と中華民国との間の国交が失われたことに起因していると理解はしていたが、その重要性についてはあまり考えていなかった。

もちろん、このことは、日華断交に意味がない、あるいは日華断交について日本に何の責任もない、ということの意味しない。むしろ、筆者の経験は、筆者自身が日華断交を主題化して調査研究しようとしてこなかったことの問題性を浮き彫りにしている。そしてそのことは、筆者自身が、日華断交が自身や台湾の人々の生活において画期となりうる可能性を認識していなかったためであったともいえるだろう。たとえ、彼らが自発的に語らなかったとしても、筆者が意識化したうえで日華断交を主題化して調査をしていれば、もっと違ったものが見えてきた可能性を否定できない。

日華断交を意識化できなかった筆者の視線の在り方が形作られた原因にはいくつか可能性が考えられる。1つは、1972年当時、日本社会では、日本と中華人民共和国との国交正常化に対する注目は非常に高かったものの、それと同時進行した日華断交に社会の目が向くことは少なかったことが挙げられる。筆者も、中国との国交樹立は日中戦争の負の側面が一定程度清算されて、新たな時代が開けるものと理解し、また広大な中国に行くことが可能になることに目を奪われていて、それと引き換えに、中華民国が国際社会から退場する一步を刻んだことに注意が向いていたとは言えない。上水流（2020）は、8月15日について、日本社会で一般にこの日が画期である

と認識されているために、台湾でも無前提に適用されうると認識してしまう危険性を持つことを指摘したわけだが、日華断交については、逆に日本では1972年9月29日が日本と中華人民共和国との関係の画期として認識されても、日本と中華民国の外交関係の画期として認識される機会が少なかったと推定される。このため、当時の日本社会全体のムードをまだ台湾研究者になるはるか前の筆者はうかつにも無意識のうちに内面化してしまったといえるだろう⁴。

もう1つの原因としては、断交後もなるべくその負の影響が大きくならないような努力がなされたということも考えられる(清水2009)。確かに、例えば、1973年から1974年の一年余り、日台間の航空路線は停止された(清水2009、119-121頁)。1974年には行政命令により日本映画の放映が禁止された(李2017、66頁)。しかし、他方で台湾では一時期の混乱はあったかもしれないが、断交によってモノがなくなって不便になったり、生活の彩りがなくなったりしないような工夫がなされるようになった。例えば、日本の映像文化に関わる禁止や制限が撤廃され、ケーブルテレビの合法化により、日本語のテレビ番組が放映されるようになるのは、1994年まで待たねばならなかった(松田2009、166頁)。しかしアニメについては、台湾のテレビ局は、日本人名や日本の伝統的ストーリー、和服や畳など日本の伝統文化の画面などをカットして放送した(李2017、77頁)。また、1976年に家庭用ビデオプレーヤーが台湾に入ったことにより、日本で上映された番組や映画がコピーされ、台湾で中国語の字幕をつけられて、レンタルビデオ屋で貸し出されるようになった(李2017、80-81頁)。1980年代中葉、筆者が台湾でフィールドワークをしていた頃、日本の歌謡曲の多くは、台湾の露店や固定店舗で安価な海賊版のカセットテープの形で売られていた。当時はまだ、著作権観念がほとんどなかった時代でもあった。3つのチャンネルしかなかったテレビ放送では、日本の歌を聴くことはできなかったが、人々の生活の中には、日本のそれらが行き渡っていた。屏東県の離島であっても、カラオケの機械を持っている家庭すらあり、日本の演歌を歌うこともできた。カラオケは家庭外のスナックなどでしか存在しえないと思っていた筆者には驚きだった。

以上のことから、日華断交は確かに外交上中華民国にとって大きな打撃ではあっただろうが、人々の日常生活における影響は、それと比較してそれほどではなかった可能性はあるだろう⁵。

第2節 日華断交から考える台湾における〈日本〉認識研究の課題

日華断交やそれに続く時期は、台湾の人々にとって、日本文化との接触の容易さや接触する文化の内容などに変化があったことは上記のことからも理解されよう。しかし、変容の主たる原因が日華断交なのかどうかについては、人によって様ではないかもしれない。以下では日華断交という問いをきっかけとして、筆者が考えた台湾の〈日本〉認識研究の抱える課題を2点取り上げたい。

1点目は、日華断交の人々の生活や台湾の文化に対するインパクトという課題設定は、我々研究者に台湾の人々の〈日本〉認識が、いつどのような形で形成され、どのような変遷を見せてきたのかということ、日本と台湾との長い交流の歴史の中で細やかに検討していく必要があるこ

とを気づかせる。この点については、既に筆者らが台湾の人々の〈日本〉認識研究について、主に植民地時代と現在との連続性・不連続性に意識が集中しがちで、「戦後に現れた日本」については注意が向いていなかったと指摘されている（所澤 2016）。

戦後、台湾の人々が消費した日本文化が、台湾の社会経済的背景の中で認識された〈日本〉を基盤としていることについては、例えば陳培豊（2021）が参考になる。陳は、台湾と日本の流行歌について、歌詞だけではなく「こぶし」や「ゆり」といった身体化された技法にも注目し、流行歌を生み出した日本の社会経済的状况を踏まえた上で、それを台湾社会の文脈と比較しながら、日本の流行歌の受容や流用がいかになされたのかを分析している。その結果、戦後における日本の流行歌の台湾での流行が、決して植民地統治の影響力の継続としてあったのではなく、むしろ戦後の国民党統治の中で新たに生み出されたことを明らかにしている。

2点目は個々人の背景によって日華断交が及ぼす影響やその受け取り方には、多様性があるという点である。例えば、断交時日本に在住していた中華民国国籍の人々にとっては、日華断交は、本人の意思のいかんにかかわらず勝手に国籍が変更させられたり、やむを得ず帰化や無国籍を選ばざるを得なくなったりするなど、生活基盤の根本を脅かすことになったろう⁶。日本に家族や親せきがいる人々にとっても、一時期直行便がなくなったことがどれだけの不便をもたらしたかは想像に難くない。台湾に在住していても、日本との人的或いは物的往来の必要性がある人々にとっては、国交断絶の影響は甚大だろう。

また、ある程度以上の知識階層にある人の中には、政治的な正義という側面から、断交の問題性を指摘する人もいたであろう。例えば、敗戦の後、断交という形で日本が台湾に対して2度も「裏切り」行為をしたと考える人もいた（謝 2000、66頁）⁷。酒井充子監督による映画『台湾人生』においても、日本が台湾を「捨てた」と語る台湾人が登場する。日本時代高等教育を受けられる台湾人女性が少なかった時代、私立台北高等女学院に進学したある女性は、日本が敗戦後去っただけではなく、日本政府が戦争で被害を受けた人たちに補償をしないことに憤っていた。日華断交によって日本が台湾を捨てたと発言しているわけではないが、戦後の日本の台湾に対する姿勢という意味では、日華断交も含めて日本が何度も台湾を「捨てた」と感じている可能性は十分あるだろう（酒井 2010、7-32頁）。

他方、日本との往来の必要性がなく、また政治的なイデオロギーより日々の生活のほうが重要な一般庶民にとって、日華断交による弊害はどの程度のものであったのかは、別途検討しなければならないにもかかわらず、これまでは研究が十分になされてきたとは言えない。今後、調査を行う中で、新聞などのメディアでの論調と人々の肌感覚との間の一致や乖離に気を付けながら研究を進めていく必要があるだろう。

ここからも見えてくるのは、自ら声をあげることの少ない庶民の視点に対してアプローチすることの少なさと困難である。台湾の人々の〈日本〉に対する認識についての研究は、文化人類学だけではなく、文化史、教育史など歴史学的な研究視座を持った研究者もけん引してきた。しかし、どの分野の研究においても、主に日本語教育を受けてきた世代（日本語人）の残したものが分析の主要な根拠とされてきた（洪 2013）。それは、聞き手側が、インタビュー対象者に、日本

統治時代に教育を受けた経験や、日常的な生活体験から始まって、インタビュー時点までの日本との関わりについての経験を質問することが多かったことに起因するのではないだろうか。また彼ら彼女らも、そういった要請を理解したうえで、自らの体験を順序だてて整理し、日本語で語ってくれた。書かれた自伝や体験談などが分析に利用される場合もあるが、それらも状況は大同小異である。つまり、日本語文と無縁な「非日本語人」が戦前の台湾社会ではむしろ大多数を占めたにもかかわらず、研究の段階では、少数派のエリート日本語教育世代の経験が前景化してしまったという問題点がある(洪 2013)⁸。この傾向は、戦後の台湾社会では、いわゆる外省人が社会の権力を握り、社会の中での声も大きかったにもかかわらず、外省人の壁を日本人の研究者が乗り越えられなかったということにもよっても強化された。結果として台湾社会の(日本)認識は、漢民族系の「日本語人」を中心にして研究され、彼らの声が台湾社会をあたかも代表するかのように見えてしまっている。しかし、もちろん、その責任は彼らにあるわけではない。

第3節 ポストインペリアルリティという課題

さて、以上を踏まえると、問題の根幹には、台湾社会を見つめる日本側の視線のありようがあった可能性が浮かび上がってくる。筆者らはこれまで、「台湾の人々のもつ「日本」への認識、台湾の人々の体験から映し出し、その生活世界に「日本」がいかに持ち込まれ、また今、いかなる意味をもっているのかを、フィールドワークを通じた語りから、また歴史的資料から探ろう」(植野 2011、1-2 頁)としてきた。また、「植民地であった台湾に如何なる研究の視角を持つのかということは、まさに自らの立ち位置を問われる」(植野 2011、2 頁)と認識してきた。

つまり、台湾の人々の認識を彼らの視線から描き出す、ということを自覚してきたわけだ。しかし、にもかかわらず、筆者らの研究が無意識のうちに陥ってきた落とし穴があった可能性がある。

沼崎一郎(2016)は、ポストコロニアリズムによる植民地的過去を再訪し、想起し、そして審問する挑戦に対して、旧宗主国(日本)出身の日本人類学者は自らのポストインペリアルな過去を再訪し、想起し審問すべきであると主張した。また、酒井直樹(2007)『日本/映像/米国 共感の共同体と帝國的国民主義』(青土社)を取り上げて、酒井が、植民地統治をおこなった日本人が旧被支配者と関わる時、我々は日本人であることから離脱できないことを認めているのに、相手を「友」として選び、ともに生きることを選ぶことで責任を引き受けるという主張に反論する。つまり、我々は被害者(及びその子孫)からの審判を受ける立場であって、こちら側から相手を選ぶ立場にはない。「友」になることで精神的な脱植民地化を達成できる立場にはないというわけだ(沼崎 2019、8-9 頁)。こうした選ぶことができない、捨てることができない「日本人」としての立場に立たざるを得ない以上は、自分のポストインペリアルな立場性の限界と制約を可能な限り可視化することが義務になる、という(沼崎 2019、9 頁)。

こうした観点から、沼崎は発表者らがこれまで行ってきた「台湾人の視点から、台湾の植民統治の経験を読み込もうとする」スタンスを批判する(沼崎 2016)。すなわち、「読み解く」側の

ポジショナリティが明示されておらず、そのポジショナリティが「読み解く」作業にどう影響を与えているのか論じられていない、というわけだ。「読み解く」作業に際して、「読み解く」側の主観をできるだけ排除して彼らの視点に寄り添うと主張しても、ポストインペリアルな立場性を反省的に自覚しなければ、外側から透明人間であるかのようにふるまう欺瞞に過ぎない、ということになるのだろう。

沼崎の研究は、日本文化論や日本植民地時代に関係する映画を事例にして、男性日本人人類学者としてのインペリアルリティを問うことで自らのポジショナリティを示したものであり、学ぶべき点は多い。例えば、沼崎（2019）は、『海角七号』について論じた論文で、インペリアルな視線の下では、「愛する日本」と「追慕する台湾」、アンチインペリアルな視線の下では「捨てる日本」と「抵抗する台湾」、ポストインペリアルな視線の下では「両義的で非決定的な日本」と「重層的で多義的な台湾」が浮かんでくる、と述べている。そのうえで、どれが本当の日本か、また本当の台湾かを見出すという作業に性急に移ることを抑制しているように見える。そして、結論部で、日本人研究者としての課題は、見え方の違いを見せ合うことで、違いがあるならば、それがなぜなのかを論じあうことだ、としている（沼崎 2019、79 頁）。

筆者には、沼崎のような3つの立場をクリアに分けた形で自分が目にするものを描き出し、それを相互にぶつけ合うだけの技量には欠けている。ただ、他者の語りを聞き、他者の行為を目の当たりにし、それが〈日本〉と関係性があるように見えた時に、一度踏みとどまり、インペリアルな拘束性から逃れられない日本人である自分がそこに〈日本〉を深読みしすぎていないかどうか反省的になる、ということが必要であると考え。また、ある事象を考察する際に、〈日本〉に関わるモノが他の関係性—例えば〈アメリカ〉〈中国〉など—と比較した時にどのような重みをもつのかを考えることで〈日本〉に過度に重要な意味を付与しすぎていないかということに反省的であるべきだと考える。このことが日本人研究者のポジショナリティの明確化として十分であるかどうかについては、いまだ決して適切な答えであるとは言い切れないが、今後も考え続けていかねばならないだろう。

おわりに

本論では、大文字の歴史によって人々の生活感覚、彼らの時代区分といった彼らにとってのリアリティが不可視化される可能性があることを指摘した。国家や国際関係の中で前景化される事象を画期とする時代区分や国民の暮らしの描写は、権力関係を含んだ代理表象の暴力になる可能性も否定できない。その意味では、より力を持ったストーリーに依拠した視点とは異なる立場から過去を想起して語り、記述することは、前者を基盤とする歴史や歴史に対する認識の客観性、自明性を揺るがし、それらが特定の立場から構築されたものにすぎないことを明らかにする力があると言えるのではないか。

また本論では、ポストインペリアルリティとの関連から旧宗主国側の日本人が台湾における〈日本〉を研究する意味についても検討した。筆者の研究の出発点は、西洋中心的な植民地主義研究、

ポストコロナル研究を相対化することだった。しかし、日本人人類学者にとって、自らのポストインペリアルな過去を再訪し、想起し審問することがどのようにして可能であるのか、まだ明確な回答は得られていない。現段階では、目新しいものではないが、〈日本〉をあるいは特定の事象を無批判に特権化することにならないように自覚的になることから始めるしかないのではないだろうか。そして、台湾人、日本人に限らず多様な人々にこうした議論に参入してもらい、日本人による特定の事象を〈日本〉と特権的に結びつけてしまう落とし穴を相対化することも1つの道なのではないだろうか⁹。

注

- 1 本発表では、日本に対する物象化されていないイメージや認識を表現する場合〈日本〉としている。
- 2 そのほか、五十嵐・三尾編 (2006)、植野・三尾編 (2011)、三尾編 (2020) なども参照されたい。
- 3 「台湾「外交部」による対日断交声明」データベース「世界と日本」(代表: 田中明彦) <https://worldjpn.net/documents/texts/JPCH/19720929.03J.html> (2023年3月9日閲覧)。
当日の『中央日報』(1972年9月30日第1版)では、周恩来を「中共匪偽政権頭目」と記述している。なお、本稿で参照した『中央日報』の記事の収集については、陳梅卿成功大学兼任教授から多大なご協力を賜った。
- 4 ヨミダス歴史館で1972年の読売新聞について「日本 台湾 断交」をキーワードに検索すると、20件の記事がヒットしたが、「日華断交」は0件、「日台断交」は15件だった。他方、「日中国交正常化」をキーワードにすると、1981件がヒットした。同じ語彙で朝日新聞の縮刷版を検索すると、「日本 台湾 断交」はわずか6件、「日華断交」「日台断交」は0件、「日中国交正常化」は831件であった(2023年3月21日検索)。
- 5 1958年に日本に留学し、後に昭和大学教授、台湾独立連盟の主席をつとめた黄昭堂は、『財訊月刊』2002年12月号において、日本と台湾は断交したが、それゆえに国民党政権はインフラ建設などに注力せざるを得なくなり、結果として台湾の経済発展につながったと述べている。また、中国と日本は机の上では握手をしても机の下ではお互いを蹴り合っているが、台湾と日本は机の下で握手をしている(中国跟日本在桌上握手, 在桌下踢来踢去, 台湾与日本間則是在桌下握手)というある評論家の言葉を引いて、日本と台湾の関係の良さを表現した。
- 6 断交時に日本に在留していた中華民国籍の人々にとって断交がもつ意味の大きさは、国籍問題として彼ら彼女らの生存に直結した。具体的事例としては、例えば陳(2005)、松田(2004)を参照されたい。
- 7 但し、謝雅梅が日華断交を経験したのは7歳の時だという。とはいえ、日本に親近感を持つ彼女が、日本に留学した後、日本の友人に「なぜ台湾を捨てるの」と聞くことは、断交の理不尽さをずっと感じ続けていたことを示しているだろう。
- 8 筆者は、いわゆるエリートとは異なる一般の台湾人が日本による植民地支配や戦争とどのように向き合ってきたのかを探る1つの方法として、民間信仰の中に埋め込まれた日本に関する記憶を、「日本神」信仰の調査研究から分析した(三尾編2022)。また、上述した陳(2021)も、筆者とは異なる手法で、一般の台湾人が日本文化をどのようにとらえ、台湾の文化に取り込んでいったのかを明らかにした。
- 9 なお、筆者はある国際シンポジウムの後のエクスカージョンで、西洋人研究者も日本人の行動を旧宗主国の人間であることと結びつけて考える思考に出会った。筆者とある台湾人が、傘を念のために持っていく方がいいと考えて部屋に取りに帰ったために集合時間に遅れたことがあった。この時、ある西洋人の研究者が、筆者に対して(のみ)「昔の支配者は遅れても許されるからいいねえ。」とコメントした。彼の発言は冗談ではあったが、誰でもありうる些細な行動も、植民地主義と結びつけてまなざされる。

参考文献

- 五十嵐真子・三尾裕子編(2006)『戦後台湾における〈日本〉——植民地経験の連続・変貌・利用——』風響社。
 植野弘子(2011)「はじめに」、植野弘子・三尾裕子編『台湾における〈植民地〉経験——日本認識の生成・変容・断絶——』風響社、1-16頁。
 植野弘子・三尾裕子編(2011)『台湾における〈植民地〉経験——日本認識の生成・変容・断絶——』風響社。
 上水流久彦(2020)「台湾の歴史の語り方」、三尾裕子編『台湾における〈日本〉認識——宗主国位相の発現・転回・再検証——』風響社、17-41頁。

- 洪郁如（2013）「理解と和解の間——「親日台湾」と歴史記憶——」『言語文化』第50号、17-29頁。
- 黄昭堂（2002）「台湾、日本桌下常握手」『財訊月刊』2002年12月号 (<https://www.wufi.org.tw/%E5%8F%B0%E7%81%A3%E3%80%81%E6%97%A5%E6%9C%AC%E6%A1%8C%E4%B8%8B%E5%B8%B8%E6%8F%A1%E6%89%8B/>、2023年3月20日閲覧)
- 酒井充子（2010）『台湾人生』文艺春秋。
- 清水麗（2009）「日華断交と七二年体制の形成——一九七二—七八年——」、川島真ほか著『日台関係史 1945 - 2008』東京大学出版会、95-125頁。
- 謝雅梅（2000）『日本に恋した台湾人』総合法令出版。
- 所澤潤（2016）「あの頃の台湾——本書を読み進めるために——」、所澤潤・林初梅編『台湾のなかの日本記憶——戦後の「再会」による新たなイメージの構築——』三元社、9-44頁。
- 陳天璽（2005）『無国籍』新潮社。
- 陳培豊（2021）『歌唱台湾——重層的植民地統治下における台湾語流行歌の変遷——』三元社。
- 沼崎一郎（2016）「台湾における日本語の日本文化／日本人論「ポストインペリアル」な読解の試み」、桑山敬己編『日本はどのように語られたか 海外の文化人類学的・民俗学的日本研究』昭和堂、371-405頁。
- 沼崎一郎（2019）『人類学者、台湾映画を観る——魏徳聖三部作『海角七号』・『セデック・バレ』・『KANO』の考察——』風響社。
- 松田康博（2009）「台湾の民主化と新たな日台関係の模索——一九八八—九四年——」、川島真ほか著『日台関係史 1945 - 2008』東京大学出版会、153-171頁。
- 松田良孝（2004）『八重山の台湾人』南山舎。
- 三尾裕子編（2020）『台湾における〈日本〉認識——宗主国位相の発現・転回・再検証——』風響社。
- 三尾裕子編（2022）『台湾で日本人を祀る——鬼（クイ）から神（シン）への現代人類学——』慶應義塾大学出版会。
- 三尾裕子・遠藤央・植野弘子編（2016）『帝国日本の記憶——台湾・旧南洋群島における外来政権の重層化と脱植民地化——』慶應義塾大学出版会。
- 李衣雲（2017）『台湾における「日本」イメージの変化、1945-2003——「哈日（ハーリ）現象」の展開について——』三元社。
- 若林正丈（2007）「台湾の重層的脱植民地化と多文化主義」、鈴木正崇編『東アジアの近代と日本』慶應義塾出版会、199-236頁。